



# み杉並る・杉並られる

第6巻第4号  
通巻第64号

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番4号 〒166-0015からす新聞本社  
からすホームページ <http://www.go-karasu.com/>

投書・お問い合わせのE-mail : colors@go-karasu.com

何だかんだ言っても、かれこれ十ヶ月ほども禁煙を続けている。自分たちの不手際の付けを喫煙者に押しつけ、そのくせお詫びやお礼の一言二言もないという厚顔が、どうにもこころにも腹に据えかね、抗議の意味で始めたもの。煙草の税金を高くしたって大して文句は出ないもんだし、少しずつらしい値段が上がったってニコチン中毒者どもは止められやしないのさ、と、破廉恥な連中のそんな思いが見え隠れする……とは少々穿ち過ぎか。孰れにせよ、増税した結果、禁煙者が急増し、意に反して税収が減ってしまったは良い。そう思った私であった。

窓を開けて外を眺める。一昔前は、天気さえ良ければ、この部屋からでも富士山が見えたもの。富士山が見えようが見えまいが、ここから、例えば、静岡県富士宮市、富士山の麓まで、この世界は途切れ目なく繋がっている。いやいや、もっとももっとずっと向こうまで連続と繋がっているのがこの宇宙。名古屋や京都、いやさ、どちら向きに進むのかにもよるけれど、進み方次第では、スペインにもイラクにも辿り着けるのだ。向きを変えて突き進めば、月や太陽とだって繋がっている私たちである。

新宿でさえそうだったのだから、ピアフラやバンクグラデシユとなると、まさに別世界。世界で何が起こつていようと、私の現実は何らかの影響があるとは微塵も感じられなかった学童。無垢なのか無知なのか、無力なくせに無鉄砲で、無闇矢鱈に自転車走り回り、無手勝流で球蹴り遊びに興じるばかり。

ところが、天王橋の上から善福寺川の汚れに汚れた水面を眺めていたある日、ふと気づく。この川をどんとどんと下っていけば、海に出るのだ、と。その海をどんとどんと泳いでいけば異国の地に辿り着くんだな、と。そう思った途端に点と点は線で結ばれ、ピアフラも東口の噴水も、バンクグラデシユもメンヒエングラッドパツハも、世界中が私と繋がった存在だと感じられるようになったのであった。

自分が世界の一部だと感じることに少しだけ似ているけれど、それでいて全然異なることに、私が日本という国家の一員だということがある。小さい頃は、自分が日本人であり、日本という国家との否応ない関係を意識することなどなかった。しかしながら、私は生まれながらにして日本人であり、法を遵守することを要求される傍ら、法によって権利を保障され、主に国家が費用を負担する義務教育を受けて育ってきたのである。

当時は、特に何を考えるでもなく、権利も義務

(最終面に続く)

## 若手下克上!?

今日の紙面から

二面 hola・新連載

三面

マン・ヒボの雨の唄

四・五面 かつら(ライノリ)

六面 『DANGO』

本 『S Language』

映画 『ロスト・イン・トランスレーション』

六面 ロンドンレポート

「ジュリアメント」

からす新聞は××××が母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。

誰でも自由に参加できます(無茶じやない範囲で)。

この世の評価は、全体的に良いももの良いとされがちだが、個々の記憶に残るものは、全体ではなく破片なのではないだろうか、と私はよく考える。本当に好きな映画は、1シーンだけが強烈で他の内容は非常に曖昧なように。勿論、下手をしたら記憶にも残してもらえない全体があるからこそ、その1シーンが強烈に残るのだけだ。

自分の住む家を仮につくるとしたら、時代の流れの中で何か新しいと言われることを考え、それを空間に置き換えていくようなことは先ずしないと思う。そんなことよりも、生活の中の1シーンが意識に引掛かることを望むだろう。風が気持ち良く流れるとか、窓から見える空や景色がきれいとか、日の光や月の夜そして嵐の日にも感謝をするような建物の中で暮らしたいと考えるだろう。それが都会の狭い土地であることが、田舎の広さよりも住んでいない土地であることが、同じだ。よりシンプルに、暮らすことを望む。

そして今回、設計する建物にテーマを求められたわけなのだが、前にだらだらと書き連ねたようなものをそのまま目指すのではなく、別の方向で考えようと思った。

- ・壁がない
- ・柱がない
- ・建具がない
- ・窓がない(または窓だけ)
- ・システムを持たない
- などなど。

ほとんどが言葉遊びではある。しかし、強引ではあるが、ある種実験的なものにならざるを得ないのではないかと思うのだ。何故なら、住みたい或いはつくりたい建物にテーマはないわけで、テーマがなく妄想だけが浮遊しているなかで、無闇にそれを追いかけて自分の理想とする空間と出会うのはあまりにも気が遠い。そこで、言葉遊びとはいえ、こういった方向に一つの可能性を探ってみようかとひとまず考えた。

### 一回生起の創作スケッチ

#### Under water

私に一番好きな空間は何かと、聞かれたら、私は躊躇なく、海の中と答えるだろう。大学時代の夏に父親に誘われたのがきっかけで、何となくスキューバダイビングをすることになったのだが、実際に潜ったときの感覚が今でも忘れられなく、これからは続けていくことになるだろう。潜った場所は、福井県の越前海岸というところである。ここは海流が激しく、スキューバーを始めたばかりの人にとっては厄介な海岸らしいのだが、その日は、まれに見る晴天と穏やかな風のおかげで、海の透明度も海流も最良の日であつたらしい。偶然が重なって、海中の魅力が堪能でき、スキューバーの虜になつてしまった。たとえば、海面までは途方もなく高く、それ以上に水平にどこまでも広がっている透明な空間が、人間の移動するスケールをはるかに越えている。その水の境界は霞んで見えなく、知覚に邪魔されないで広がっていらばいほど良い。光が様々な形の帯を作つて海に溶け込んでいく感じがよい。地上の騒々しい自動車やラジオの音から遮断されているのに、はつきりとした境界がわからない感じがよい。聞こえてくるのは自分の呼吸音とかすかな他人のそれ、そして水の流れの音くらいで、これらが自然のリズムで感じられるのがよい。また、魚が餌を捕ろうとしたり、移動したり、隠れたり、コミュニケーションをとったり(???)と、それとは気づかれないように巧みに行うことができる不定形な石・砂の凹凸と水が織りなす空間がよい。それらの魚達と潜っている人間は、あたりまえのことだが、国家や共同体といった人間のつくつた制度の枠組に囚われず、互いに危険の及ばない距離を自

然に保ちながら漂っているその関係が心地よいわけである。

どんな意味をそこに仮託しても意味をなさない空間である。ただ生物が自由に移動し、光と水と石の織りなす空間の中でゆつたりと生きていく。こういった海中の様子が私を惹きつけたのだ。

好きな空間は何かと問われてもなんとなく答えられる。しかし、建築デザインというシンドイ作業をなぜ自分で行っているのか、何か建築(住宅)のテーマはあるのか、と問われると困つてしまふ。このことは学生のときから、何度も考えてきた。一時期、共同体をつくり、人同士を幸せに結びつけるための建築を設計することが、建築デザインのテーマになりつつあるのではと本気で思ったことがあつたが、今では、違つような気がしている。なぜなら、デザインがなくても、必要なら人々は仲良くなるか他人であるかは勝手にどこでもできるものだ。それじゃあ、何が建築(住宅)のテーマなのか?その建築の存在根拠は何なのか?正直言ってやっぱりわからなくなる。でも、一つ確かに言えそうなことは、まだ見ぬきれいな空間を作りたいという欲求があるということである。

#### 自立した建築の部分

海の中は前述のように自由で美しい空間であつた。だが、それと同時に人や魚を惹きつける(理由はそれぞれ異なるが)場所がある。ちよつとした海底の窪み、海中洞窟、ウオーターフォール、サンゴ礁、海藻の林、沈没船等といった、何かしら意味のある場所を人や魚は発見する。

海の中から地上に想いを移したとき、自由に移動しながらもどこかで深い意味のある「場所」を発見できる、そういった空間を創作する意欲が私の中に生まれてきた気がする。目的的空間に近づいたためには手段が必要である。私は、意味のある「場所」を発見するために、そのきつかけとなる自立した建築の部分をつくっていきたいと考えている。それは、物体やヴォイドの形がもしれないし、壁、天井、床といった建築の構成要素がもしれない。どういったものになるかは、そのときどきによって変わらぬと思う。そしてその自立した建築の部分をとりにくく空間は、開放的で人間の移動する感覚を束縛しないものであれば、どのように形作つてもよい。そのような漠然とした空間のイメージが私の創作意欲を維持させている。

(高橋)



(七)



## ヤンヒポったら何やってんだか

最近、とんと姿を見せないヤンヒポだったのだが、2ヶ月程前ある南の島に姿を見せたとの事。いったいせんたい、何をやらかしたのだろうか。まあ、ろくでも無い事に間違いないのだが・・・。

二月下旬、東京では春まだ遠い頃、ヤンヒポは土曜未明午前一時過ぎにグアム国際空港に降り立った。成田を出たのが金曜の午後八時を過ぎた頃。人から渡されたコンチネンタル航空ビジネスクラスのチケットを使い、荷物もいち早く回収出来たのだ。とはいえ、前回グアムに来たのは十数年前。もちろん、当時の記憶はほとんど残っていない。しかし、南国独特の湿気を含んだ熱気は忘れていなかった。空港は深夜という事もあり、閑散としていて、同じ飛行機に同乗していた平民クラスエコノミークラスの乗客が出てくるまでまばらな状態が続く。ヤンヒポはいち早くタクシーを見つけ、指定されたホテル名を告げた。

グアム島はミクロネシアのマリアナ諸島にあり一八九八年米西戦争から米合衆国の領域となる。しかし、一九四一年から一九四四年までは大日本帝国が支配していた。日本軍占領から奪還する為に行った上陸作戦の戦場には今も弾痕や砲弾の跡が数多く残っている。その後一九五〇年にアメリカの準州としてカリフォルニア州法により可決された。ただ、合衆国大統領の選挙権は持たされていない。人口は約十五万五千人。しばしば、ハリケーンの被害を受ける常夏のリゾートアイルランドであり、日本からも三時間少々という距離の為、毎年多くの日本人観光客(ジャパ観)が訪れる。

ヤンヒポを乗せたタクシーが繁華街の入り

口にさしかかる頃、常に海外ではそうあるように、いつものごとく運転手から色々情報を引き出そうと試みた。えてしてその町の目玉、特にナイトライフについてはタクシーの運転手ほど貴重な情報源はない。運転手もヤンヒポが一人だという事をよく解っているのだから、アンダーグランドな話でも唇が滑らかくなっており、いかにも下心丸出しの同輩といった感であれこれ情報を差し出した。

やがてタクシーは繁華街を抜け小高い丘の上に着いた。その建物は白を基調とした大きめの団地のようなたたずまいで、エントランス脇には二十五メートルのプールがライトアップされていた。泊まり客なら二十四時間いつでもプールで泳ぐ事が出来そう。フロントで鍵を受け取り、三階エレベーターホール直ぐ脇の部屋に入り驚いたのは、兎に角、良くエアコンが効いていて、思ったより広い部屋だった事だった。さらに、部屋の奥は一面窓になっていて、一坪ほどのベランダがあり、丘下の繁華街とその向こうには太平洋まで見渡せる眺望を備えていた。ただ、リゾートマンション形式なので、高級ホテルのようなサービス体制では無いが、空だが冷蔵庫や電子レンジと電気コンロにヤカン、コーヒーマーカーが備えてある。これから一週間滞在するには十分の機能を備えていた。ヤンヒポは即座にイスをベランダに持ち出し、夜の海を眺めながらタバコをふかした事は言うまでもない。

時間は既に午前二時をまわっている。しかし、タクシーの運転手から色々情報を入力しているヤンヒポは、それらをどう有効活用しようかとあれこれ思案を巡らしていた。すると、ふいに携帯電話がけたたましく呼び出し音をならした。ヤンヒポは「ちいっ」と舌打ち

をして、ほぼ世界中のどこに居ても日本と同じように受けられる携帯電話を見つめた。

次の朝午前七時、日本出国前から指示された通りホテルフロントで待っていると、一台の乗用車が車寄せに入ってきて、当然だが、よく陽に焼けた小柄な日本人が、若干緊張した面持ちで話しかけてきた。余談であるが、ヤンヒポは、その風体から初対面の相手には必ずと言って良いほど警戒心を与える。ヤンヒポ本人もその事は熟知しているので、今更驚く事はない。ただ、敵対しないと解っている場合は、努めて愛想よく振る舞う事になっている。その小柄な日本人は自分の事を「ヒロ」と名乗り、言葉の節々に東北地方の訛りが聞き取れた。年齢は丙午生まれ、今年で三十八歳になるという。ヒロの乗ってきた乗用車は小型の日本車で割と小奇麗にしてあり、エアコンも良く効いていた。ヒロに促され、ヤンヒポは助手席に乗りシートベルトを締め、車は丘を下って行った。

ホテル街のある繁華街を抜け、車で走る事約二十分、平らに広く開けた場所の一角にある平屋作りの建物前に着いた。途中、別なホテルに寄り、夫婦モノを一組後部席に乗せてきた。亭主の方はヤンヒポより明らかに年下にも関わらず、間違い無く老けている。

「野比のび太」が大きくならたらこうなるだろうと予想に難くない風采。かみさんとは言いがたい。どちらにしても運動神経は鈍そうである事は間違いない。なんでも、ちょうど一年前に北海道からここへ来たらしい。さらに、しばらくするともう一人このパーティに加わる若者が合流した。彼は神奈川出身で多摩美術大学(通称・多摩美)に通う二十歳の学生。唇が厚く面長の面構えからすると、あまり期待出来そうも無い。ただ救いなのは、三人共、

ひねくれているはいないようだったことだ。

ヤンヒポをはじめ、のび太夫婦と多摩美、これにヒロを加えたら五人でいったい何がはまるのやら。そして、昨晚かかってきた電話の正体とは……。因に、昨晚の電話はヤンヒポが出るまで延々と鳴り続けたのだった……。





CDs

もう何枚同じディスクを買った事だろうか。最初は中学生の頃だったと思う。ピアノを担当しているジョン・ルイスが作曲したアルバムタイトル曲のDJANGO(ジャンゴ)はジブシーの血を引くベルギー生まれの名ギタリスト、ジャンゴ・ライン・ハルトの死を悼んで作られた名曲。一言でジャズといっても多岐に渡るパリエーションがある事は言うまでもない。その中で、ジャズってこういうモノなんだと一番多感な時期に感動を覚えたディスクがこれ。決して派手ではないが、心地が良く飽きの来ない音。何年経ってもまた聞きたくなり、ついつい同じディスクを買い直してしまふ。もちろん、最初に買ったのはLPレコードだったが・・・。ジャジーな気分に入るなら最適の一枚なのだ。是非、お試しあれ。

(小張寅造)

## DJANGO

THE MODERN JAZZ QUARTET

ビクター 1953年~1955年録音

VICJ-2026



## 5 Language

ネコ・パブリッシング, 2003

ISBN4-7770-5006-8



Books

「絵と5つの国の言葉でひくビジュアル事典」とサブ・タイトルにあるように、こざつぱりした写真やイラストに、英仏独伊日の五ヶ国語の単語が添えられているばかりのもの。

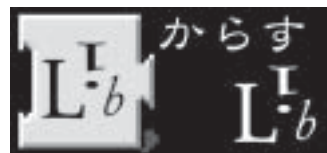
どうでもいいことだが、コンピュータの項にはウィンドウズではなくマッキントッシュの写真が採用され、その横に置かれたモニタのスクリーンにはロジックではなくデジタル・パフォーマでの作業が映し出されている。この偏り具合が、マックおたく、デジパフォ鼻根の私を揶る。

本書は、オリジナルではスペイン語だった部分を日本語に置き換えたもの。原書では各国語間の類似と微少な相違が頁から穏やかに浮かび上がるようなものなのだろうけれど、この日本版ではヨーロッパの言語はどれも似ているなあ、というのが率直な第一感。

寝転がって頁を繰ってゆくと、意外に楽しい時間を過ごすことができる。こぎれいな画像に心和み、おまけに少しは外国語の知識も増える。なかなか気の利いた暇潰しではないか。

(全木)





# ロスト・イン・トランスレーション

監督：ソフィア・コッポラ

主演：ビル・マーレー、スカレット・ヨハンソン

配給：東北新社

<http://www.lost-in-translation.com/>

観た誰もがいい感想を言わなかったけど、それでも、ケヴィン・シールズの音楽を、ビル・マーレーとスカレット・ヨハンソンというキャストにソフィア・コッポラの脱オシヤレ系を、強引に期待して観に行ったのだ。

強引に期待してバカだった。日本を笑いのネタにするのはいい。キャストもやっぱり悪くないと思う。でも、途中から急激に寒くなり出すのだ。藤原ヒロシやヒロミックスがでて、お友達モードになる。その瞬間、金返せ、と。アメリカ人だとかいう時にポツプコンをスクリーンに投げつけたりするのだろうか。とにかく、バカにされている感、たっぷりなのだ。ケヴィン・シールズのギターが相変わらず良くても、他のサントラが、スクエアプッシュァーだのエルだのジーザスアンドメリーチェインだのデスインヴェガスだの、拳句の果てにはっぴいえんど。どれも、かなり好きなのだ、ま

るで、私のような『自称音楽好き』をターゲットにしましたと言わんばかりの面子。結局そんなんで、ラストを向かえても映画としては何も残らなかつた。観る人をバカにするつもりはないとしても、仮にもこの映画をまじめに作つたと言つのなら、もう映画を撮る必要のない人だとすら感じた。これが彼女の全てなのなら、表現する者としていかに浅はかか感じて欲しいものだ。今思い起こせば、キャストも狙い通りだったのかもしれない。映画が終わってまわりを見まわすと、同世代の似たような人間ばかり。そんな類の人間しか集まらないなんて、閉じた小さな世界だな、と。現実には痛々しいもので、自分もその一員だと思つて再び寒気がした。

とはいえ、帰り道、HMVに寄つてサントラを買つた。悔しいけど、音楽はいいから。

(と)

Brilliant



最近こちらでも、段々と日が長くなってきた。冬は驚くほど日が短い。に対して、夏は日が長い。どのくらい長いかというと、仕事や学校が終わった後、外でビールやらコーヒを飲んでいてふと時計を見ると、もう夜の九時半過ぎだったりするくらい。自分はまだ夕方過ぎぐらいのつもりでいたりするので、流石にびっくりする。今はまだそこまで

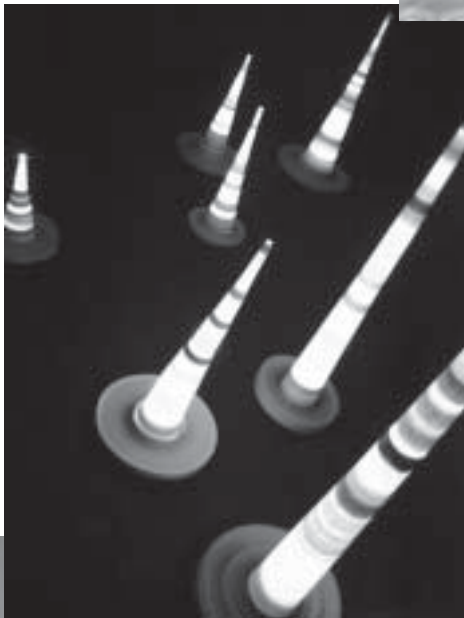
は日が長くないが、それにしても何かと気分がいい。そう言えば、冬よりも夏の方が朝起きやすいような気もする。そんな事を考えながら一年の流れを思うと、やっぱり人は動物なのだなあと感じる。明かりと、人の生活は密接に係っている。朝と夜では全く体調や心持ちが違ってくる。また冬と夏でも違うのだろう。どちらの時間に活動するかは別として、人間が睡眠無しでは生きられないのと同じように朝と夜、明るい時間と暗い時間と言うサイクルを身体は必要としているのかもしれない。そう考えると実に興味深い。人と動物との原則的な違いの一つとして、「道具を使う」という事があるが、「明かりを使う」という事はまたその先の、道具や知識、学習能力といった人間の集大成、いわゆる人と動物の違いを代表するような道具のような気がしてくるのだ。それが光を生み出すものなのか、闇を壊す道具なのか、その感じ方はそれぞれだとして、炎のみが明かりとして使われていた時代と、電球へとその姿を変えた後の時代を比べるだけでも、それがいかに重要で、人間の生活に大きく関わる道具だということとが分る。

先日、ヴィクトリア&アルバート・ミュージアムで「Brilliant」と呼ばれるエキシビジョンがあった。ライト・照明器具のエキシビジョン。最新のデザイナーやアーティスト達のユニーク



な照明が次々と並んでいる。明かりが道具の代表だとするのならば、デザインや芸術といった分野は知識の代表だと言えるのかもしれない。人と動物の違いと人間とコンピュータの違いがそれぞれに見えないだろうか？ そんな道具とアイデアが共存するこのイベント。実際にバラエティに富んでいてユニークな内容だった。電気が生み出す影で遊ぶ様な作品もあれば、その物質が反射する光をもってライトだとする物、色や形、材質に至るまでその遊び方は実に多様だ。照明器具は、椅子に並んで最も一般的なデザイン対象なのかもしれない。そのエキシビジョンの内容が素晴らしかったのは言うまでもなく、何よりもその道具としての明かりとそのデザイン、芸術といった可能性の広さにワクワクし、遊び心にとんだ照明器具達に楽しい気持ちにさせられた。思わず、お土産に売っていた発光ダイオードのライトを、レジで値段を聞いた後に散々悩んだあげくに買ってしまった。夏のおいが嬉しかったのか、何となくその日はビールが飲みたい気分だったので帰りがけにビールとほうれん草も買い、家に帰った。ほうれん草のお浸しをつまみに飲むビールは美味く、小さく光る発光ダイオードを見つめながら、何故か漠然と、やっぱり夜も必要なんだなあ」とそんな事を思ったのである。

(神山)



# 不定詞の未来、動名詞の過去

大臣：

*I forgot to pay* for my pension.

「年金払うのを忘れてました」

*I forgot paying* for my pension, too.

「年金払ってたのも忘れてましたけどね」

to pay と paying。文法的には不定詞と動名詞。どちらも「払うこと」と教わった気もするが、上の例では「払うこと」と「払ってたこと」と明らかな区別がある。それは - - -

< to + ~ > は、その前の動詞より先(未来)のこと。

< - ing > は、その前の動詞より以前(現在および過去)のこと。

これを踏まえれば、次のような言い方も納得できる。

*I tried to help* Iraqi People.

「私はイラクの人たちを助けようとしたんです」  
<これから助ける>

So *I tried visiting* there.

「それで試しに行ってみたんです」  
<すでに訪れた>

中学2年で「不定詞」を習うと、to cry が「叫ぶこと」を意味することを覚える(名詞的用法)。続く「動名詞」では、crying がやはり「叫ぶこと」であることを知る。だから、以下の2つの文はどちらも正しく、意味も同じと考えていいことになっていた。

They *started to cry* "Allah akbar".

They *started crying* "Allah akbar".

「彼らは『神は偉大なり』と叫び始めました」

このように、確かに同じ意味になる場合もある。like(または begin, start)なら後ろはどっちでもいいのだ。しかし、want(または hope)だったら、

*I want to help* you.

× *I want helping* you.

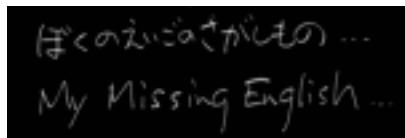
「私、あなたたちを助けたいの」

反対に、finish(または enjoy, stop)だったら、

× *I enjoyed to abuse* them.

*I enjoyed abusing* them.

「私、彼らを虐待するのを楽しみました」



学校英語にわすれものありませんか？

ということになっている。中学のときは数も少なく、それほど混乱もなかったかもしれないが、状況は高校になると一変する。

< to + ~ > のみを従える動詞：agree(同意する)、expect(予期する)、pretend(ふりをする)、wish(したいと思う)、.....

< - ing > のみを従える動詞：admit(認める)、avoid(避ける)、deny(否定する)、mind(いやがる)、.....

どちらもあるが意味が変わるもの：remember(おぼえている)、forget, regret(後悔する)、try, .....

冒頭の forget や try は上の第3グループに属するわけだが、ここまで来ると憶える気も失せてくる。そこでこう考えてみてほしいのである。

< to + ~ > = 先(未来)

< - ing > = 以前(現在および過去)

いくつか他の例を出してみる。

< to + ~ > のみを従える動詞

A young cuckoo ejects its foster brothers from the nest and **pretends to be** an only baby of its foster parents.

「カッコウのひなは、乳兄弟たちを巣から放り出し、育ててくれる親鳥のたった一羽の子どものふりをする」

pretend「~のふりをする」。カッコウのひなによる「子どものふり」は、巣立ちまでずっと続く。

Katsu **agreed** with Saigo **to surrender** Edo Castle to the Imperial Army bloodlessly.

「勝は西郷と、江戸城を血を流さずに官軍に明け渡すことに同意した」

agree「~に同意する」。明け渡すのは、同意してからのことだ。

< - ing > のみを従える動詞

The freshman lawmaker **admitted lying** about his academic background

「その1年生議員は、学歴で嘘をついていたことを認めた」  
admit「~を(しぶしぶ)認める」。過去に行ったことなどについて、後から仕方なく「認める」ときに使われる言葉だ。

The ex-secretary general **denied desiring** a menage a trois with his lover and her mother.

「前幹事長は、愛人とその母を交えた三角関係を望んだことを否定した」

deny「~を否定する」。過去にそういうことがあったことを否定するのである。

(最終面に続く)

(七面から続く)

どちらもあるが意味が変わるもの

棟梁:

You, *remember to bring* your tools tomorrow.

「おめえ、明日は道具持ってくるの憶えとけよ」

与太郎:

I *remember leaving* my tools today.

「きょう道具おいてきちまったのは、憶えてるです」

実演販売:

You won't *regret getting* our legendary Ultra Power Kitchen Mixer.

「私どもの、伝説的ウルトラ・パワー・キッチン・ミキサーをお買い上げになったことを、後悔なさるようなことはございません」

カード会社:

We *regret to inform* you that your credit card is over the limit.

「残念ですが、あなたのクレジットカードは限度額を越えておりますことをお知らせしなくてはなりません」

つづく(望月)

bar&kitchen kanna

**編集後記**  
 からす新聞第六巻第四号(通巻第六四号)、無事、発行できました。新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。次号発行予定日は二〇〇四年五月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。

1クラス4人までの少人数制学習塾

**ファミマ**

中野区本町2-50-12 ドエル中野201号  
03-3379-1451

**ファミマ**

(一面から続く)  
 も受け入れるばかりであったけれど、歳経るに連れ、善くも悪くも社会の仕組みに、より現実的に組み込まれていくことになった。高校生にもなれば、オートバイに乗ってみたりするもの。跨がただけでなく走らせようと思えばガソリンが必要だが、その料金にはたっぷり税金が含まれていた。あちらこちらを走り回って喫茶店で一服する。その煙草にもたっぷり税金が含まれていた。クラスマッチだ文化祭だ、と何かにつけて宴会を開いたりするものだが、そこで消費するアルコールの類にかかる費用にもたっぷり税金が含まれていた。これは七〇年代の話。

現代では、消費税なんてものがあるので、もっともつと若い(というより幼い)うちから税金というシステムに直接参加することになる。御菓子やミニカー、ジャンプやクレヨン、どんなものを買うのにも税金を取られることになるのだから。そんな小さい子からさえも徴収される税金はどこへ行くのかというと、国家というものをまともに運営するための費用になる。簡単に言えば、自分

たちの面倒をみるのに自分たちのお金が使われるというだけのこと。そのために、議員やら役人やら、駐在さんやら図書館のおねえさんやらを雇って私たちのために働いてもらっているわけだ。何もおかしなところはない。公僕なんて言葉があるけれど、例えば、国会議員なんてものは、投票で選ばれた、正に公の僕なわけである。にもかかわらず、彼らは自分たちを先生と呼び合い、一般大衆にも先生と呼ばれたり、僕であるにもかかわらず尊大横柄な態度を旨とし、自分たちの権利を最優先にして、主権を持つはずの国民を蔑ろにする。全員がそうだとはいわないけれど、真つ当な公僕を探す方が難しいと感じているのは私だけではないはずだ。

もちろん、一番悪いのは、こんなろくでもない連中に国家を任せてしまった、つまり、選挙で思かな選択をしてしまった私たちである。次の選挙ではもう少しはましな連中を雇いたいものだ。なくては、投票する権利もないのにお小遣いから税金を巻き上げられている子どもたちに申し訳が立たない。

世界は繋がっている。善福寺川をずっと下って、海を渡ってみたところ……なぜかそこにはアメリカがどかすかばかすか爆弾を落としていて、その横で自衛隊が素知らぬ顔をしていて、多くの罪のない人々が苦しんでいる。困ったときには助けられたい。そういう素朴な共感を持つのは人として当たり前のこと。しかしながら、そんなことさえ理解できない愚か者を公僕の親玉にしてしまっている国。それが日本というものなのだ。あらあら、びっくり。

世界は繋がっている。善福寺川をずっと下って海に出て、さあ、私たちがどこへ行くのか。「船頭多くして船山に上る」という諺があるけれど、気の触れた船頭に任せるよりはましかな、と思わざるをえない今日この頃、皆様におかれましては、如何がお過ごしでしょうか。

(全太)



Ken-ichi Shinozaki,  
 architect

Voice: +81-3-3220-0644  
 Facsimile: +81-3-3220-0640;  
 e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp  
 篠崎健一アトリエ